その 53

万葉、最後の旅へ（その 1）

翌朝ホテルのカーテンを開けると、小さな丘が 1 つ見えた。大和三山の 1 つ、畝傍山のようだ。他の二山は見ることができなかったが、この後ゆっくり見ることができる。そこで、まずは今回の万葉の旅の一番の目的である奈良県立万葉文化館に向かった。これまで 2 回取材などで訪れたことがあるが、自分の運転で向かった文化館は、「道を間違えたか、引き返そう」と思ったほど、明日香村の鄙びた山あいにあった。

今回のお目当ては、同館で、6 月 18 日から始まった「甦る万葉衣装展」である。これは、古代衣装研究家の山口千代子氏が制作した古代衣装を展示し、飛鳥時代から奈良時代、平安時代初期まで、200 年間の衣装の変遷をたどるもので、訪れた日は山口さんご本人が解説するギャラリートークが予定されていた。

山口さんとの最初の出会いは、ちょうど 10 年前の 2013 年 7 月だった。東京よみうりホールで行われた万葉学者上野誠氏の講演会で、上野氏の万葉教室の教え子だった女優松坂慶子さんが万葉集を朗読するというので、「見に行った」のが、そのきっかけだった。松坂さんは、万葉衣装を着て額田王の万葉秀歌を朗読したのだが、聴衆は大女優の名調子に魅了された。朗読もだが、私がとりわけ惹きつけられたのは衣装だった。古代風に髪を結いあげ、鮮やかな紅紫の古代衣装に目を奪われた。彼女を取り巻く数人の子供たちも、女子は明るく、男子は素朴な衣装が、かつての明日香村の里人たちを彷彿とさせた。終わるとすぐ、舞台裏を訪ね、衣装を担当された山口さんに初めてお目にかかり、その場で山口さんにお願いしたのが、次の申し入れだった。「3 か月後の 10 月、万葉故地高岡市の市民ホールで、万葉の音楽朗読劇を公演するのですが、その衣装をお願いしたいのです……」。

山口さんは、即答してくれた。「分かりました。喜んでお引き受けします。大変そうだけど、楽しみです」。

そして、2013 年 10 月 5 日、大伴家持役に俳優石黒賢さんを迎え上演したのが、音楽朗読劇「万葉ファンタジスタ大伴家持～いや重けよごと」だった。翌 14 年 9 月、好評に応えて、その改訂版を上演できたのも、観客を万葉の世界に誘う万葉衣装の力が大きかった。

そして、その高岡の観客の 1 人、鳥取の因幡万葉歴史館金指館長の要請で、大伴家持生誕 1300 年記念事業のファイナル・イベントとして、2019 年とりぎん文化会館で家持役を和泉元彌さんで音楽朗読

劇「いや重けよごと～愛のもののふ大伴家持」を公演した。この時「お芝居の神様が降りてきてくれた」のだが、この神様、万葉集由来の「令和」という新元号も持って降りてきてくれたのである。降って湧いたような万葉集ブームに勢いを得て、念願の東京、浅草公会堂での公演を決断。山口さんにその意を伝えたところ、諸手を挙げて賛成してくれた。そして、その直後の苦渋の公演中止と世界的なコロナの蔓延。

山口さんに公演中止のお詫びの電話を入れた時、「折角いい作品に出会えたのに……」と言ってくれたことが、今も心に残っている。ともに苦労しながら成功を収めた後だっただけに、公演の中止を悔やみ心から残念がってくれた山口さんとそのお仲間は、他の誰にも代えがたい盟友だった。

そんな山口さんが、これまで作り上げてきた万葉衣装の集大成ともいえる「甦る万葉衣装展」である。久しぶりにお会いした山口さんは、相変わらずお元気そのもの、お淑やかなのだけれどエネルギッシュ。ギャラリートークの前に、2 つの大事な情報を教えてくれた。

その 1 つ。ギャラリ―トークは、衣装展のタイトルにもあるように、「飛鳥時代から、奈良時代、平安時代初期の 200 年の衣装の歴史」について語るのだけれど、今回のトークのポイントは、「ここです」と言う。「奈良時代の万葉衣装が、現代の私たちのファッションに、そう、世界のファッションにつながっているのよ」。

「1300 年も前の万葉衣装が現代につながっている？」という疑問とともに興味がそそられる。

もう 1 つは、意外な、それも、知る人ぞ知る情報の提供だった。「ギャラリートークは 2 時からだけど、それまでの腹ごしらえに、館内のカフェの名物ランチがお薦めよ。明日香に来た記念に、これだけは食べて行って」という。「万葉衣装と明日香と名物ランチ……？」。これまた、いたく興味関心がそそられる。

ならば、早速そのカフェで、そのお薦めメニューを注文したところ出てきたのが、この料理。古代の野菜サラダ？いいえ。ならば、野菜の煮つけ盛り合わせ？　ブー……では、一体何の料理かお分かりか？

実はこれ、「カレーライス」……「カレーライス」としたら、「カレー」も「ライス」も見当たらないが……。そう、これは、間違いなく、山口さんお薦めの「野菜カレー」で、山盛りの野菜の下に、ご飯とカレーが隠れていた。

ご飯は玄米で、これも野菜をじっくり煮込んだのだろう、カレーととても相性がいい。その上に乗っている野菜は、煮たものから生野菜まで、カレーにつけて食すると、これまたいろんな味と異なる食感がとてもいい。ただ、その野菜は、ニンジン、ナス、カボチャ、レンコンまでは分かるが、何か分からない野菜もいくつかある。カレーに付き物のジャガイモや玉ねぎは、上に載っていないところを見ると、カレーの中に煮込んで溶けているのだろうか。店の人に聞かなければとても分かりそうにないので、野菜の仕入れから帰ってきた店長をつかまえ話を聞いた。

そもそも、「このようなカレーを作るようになったのは？」という最初の問いに、若き店長は、いきなり「亡くなったおばあちゃんへのオマージュです」と答えた。「子供の時からおばあちゃんのビーフカレーが大好きで、おばあちゃんが亡くなった時、カレーを出すカフェ・レストランにしようと思いました」という。そこで、やる以上は、明日香大好き人間の自分らしい店、明日香村の特産品をいっぱい使ったカレーを、ということで、家族と相談して「野菜カレー」のレシピを作ったという。明日香村の農家さんは、できるだけバラエティに富んだ野菜作りをモットーに、多品種少量、良質の野菜作りにチャレンジしているので、それに共感、賛同して、レシピを工夫したという。カレーの上に乗っている野菜は、季節やその日によって違うが、最低 11 種以上。そこで、これまで食べたことも見たこともない野菜は何か聞いてみたところ、「カボチャのように黄色くて生で食べるコリンギ―とか、恐竜の卵の形に似たマイクロ胡瓜」などだ、という。

この「野菜カレー」、山口さん、お薦めの通り、とても美味しかった。店内のレイアウトも、窓際の席は大きな一枚ガラスの向こうに万葉の庭が広がり、明日香の緑を見ながら明日香特産の野菜を味わうのも、万葉文化館のよき思い出になること、請け合いである。

そういえば、1 年の内 1 日だけ、「野菜カレー」の代わりに、「ビーフカレー」を出すことにしていると、若き店長は言う。「おばあちゃんを偲んで、自分の誕生日の 1 日だけは、ビーフカレーを出す」。店の原点ともいえる「おばあちゃんのビーフカレー」も食べてみたいものだが、店長の歳と誕生日を聞きそこなった。

「甦る万葉衣装展」展示会場

山口千代子さんの「甦る万葉衣装展」のギャラリートークが始まった。会場は、奈良万葉文化館の企画展示室、400 平米の広い会場に、約 90 点の古代衣装が展示されている。会場に入ると、その鮮やかな色どりに目を奪われる。マネキンに着せた数々の古代衣装、壁に掛けた衣や布、高い天井からつるした幡など、広い会場をうまく使って展示し分かりやすい。大きく分けると、時代的に、3 つに分けて陳列されている。それらを順次見ながら、山口さんの専門的でありながら、素人にも分かりやすい解説に参加者一同耳を傾けた。

最初の展示コーナーは、聖徳太子に代表される「飛鳥時代」、つまり、ここ明日香に飛鳥京の都があった時代のファッションである。山口さんの、このコーナーの最初の解説からして、なぜ古代の衣装がこのように色鮮やかなうえ、色とりどりなのか、まずは理解することができた。

聖徳太子の業績は上げるといくつかあるが、真っ先に手を付けたのが、日本で初めての冠位 12 階の制定だった。朝廷に仕える臣下を 12 の等級に分け、人材登用の道を開いたのだが、その地位を表すため、それぞれの位階に色別の冠を授けたのである。その上位から、紫、青、赤、黄、白、黒のそれぞれに濃淡があり、全部で 12 色。そして、その色は、冠だけではなく衣装の色もそれに合わせたのである。最近は少しは変わりつつあるようだが、現代の地味な背広上下一色という光景と比べると、当時のお役所は大違いだったようだ。

法隆寺に隣接する中宮寺には、現存する日本最古の刺繍「天寿国曼陀羅繡帳」（国宝）があるが、これは聖徳太子の死後の世界を刺繍したもので、今もその一部に飛鳥時代の染色が鮮やかに残っている。山口さんとその仲間は、この繍帳をもとに当時の衣装を復元したのである。中国を参考に取り入れた冠位 12 階ではあったが、同時に、「服位 12 階」でもあったのである。

次のコーナーは、都が明日香から「藤原京」に移った時代のファッションということになるが、これは、かの有名な高松塚古墳の壁画に描かれたファッションと言った方が分かりやすいだろう。

昭和 47（1972）年に極彩色の壁画が発見されたことで一躍注目された高松塚古墳、その壁画は教科書等でもお馴染みだ。その教科書に取り上げられた西壁の壁画、かの有名な 4 人の飛鳥美人と呼ばれる「女人像」（冒頭の写真）の衣装が再現されて、壁画と同じように立ち並んでいるのである。その隣に、東壁南端の 4 人の「男子像」も同じように復元展示されている。頭部なしのマネキンはちょっと物足りないにしても、それぞれ 4 人の立体像と衣装のリアリティは、複製画にない生々しさがあって面白い。

そして、今回の展観のメインとなる「奈良時代」、言わば、万葉の時代のファッション・コーナーである。

710 年に藤原京から平城京に遷都、718 年養老律令が制定されると、その中の衣服令(えぶくりょう)で、公人の衣装は細かく決められ、身分や位の違いによって公服を、「礼服(らいふく)」、「朝服」、「制服」に分けて規定された。その他、農民や庶民が着ていたのは、麻布の首だけ開けた粗末な衣服「貫頭衣」だった。

このコーナーが、実質今回の衣装展のメインとなることもあり、山口さんは、ここで多くを解説してくれたが、紹介しきれない。そこで、山口さんが事前に教えてくれた、「万葉衣装は、現代につながっている」という話に絞ってまとめてみよう。

この時代、中国唐の都に、それまでのワンピース型、いわゆる着物スタイルとはガラッと変わる、ニューファッションが入ってくる。発生地は、現在のウイグル、チベット地方の騎馬民族の衣服で、馬に乗るのに便利なツーピース型、つまり、上着とズボンがニューファッションとなり、中国全土に広がる。それを、遣唐使がそのまま日本に持ち帰り、わが国のニューファッションになる。その後、日本だけではなく、全世界に広がり、現代の洋服のルーツになったという。

ところが、わが国の場合は、平安時代になると、十二単に代表される着物スタイルに戻り、洋服として「甦る」のは 1000 年以上も後の明治時代になると、山口さんは明解で説得力あるギャラリートークをまとめた。

山口さんの衣装についての該博な知識には驚かされるばかりだが、その原点は奈良国立博物館で、長年携わったボランティア活動だったという。山口さんは、そもそも洋裁教室を主宰されていたことから、古代衣装に関心を持つようになったのだが、現在の万葉衣装制作のお仲間は、その時のスタッフや生徒さんだったという。

30 年来の洋裁教室の生徒さんたちは、これまでいつも先生の無理難題に応えて、注文以上の作品を作り上げてきた。古代の衣装の素材は、「衣」はキヌと呼び絹織物を、「布」はヌノと言い麻織物のことを言う。ある舞台で阿倍仲麻呂の衣装を依頼された山口先生は、「今ある『衣』はどうも感触が違う。家蚕(かさん)の布では、奈良時代の衣装の質感が出ない。野蚕(やさん)の布は手に入らないか捜して見ます」と言う。家蚕とは屋内で繭を作る養蚕のことで、野蚕は野生の繭から作る「衣」のことである。ところが先生の見つけてきたのは布ではなくごわごわした野蚕「糸」だった。どうもお仲間の 1 人が織機を持っていることを知っていたらしい。「これを織ってくださる？」と、優しい口調でまたまた厳しい注文が飛んできた。物置の隅から古い織機を引っ張り出し苦心惨憺、ガッタン、ゴットン…… 1 か月かけて 1.5 反の「布」を織り上げたのである。糸目を整えるため洗濯機を回すと、しなやかながら腰があり、素朴な中に光沢がある見事な布が出来上がったと言う。先生とお仲間は常に切磋琢磨し、とことんより良いもの作りに拘る姿勢には頭が下がる。舞台制作に関わるものにとっては、何とも頼りになるわけである。

これら万葉衣装の素材の入手について、山口さんは言う。

「この何年間は、万葉衣装の素材集めには、絶好でした。つまり、これまで着物を着ていた人たちが着物を着なくなったのです。ところが、その多くの着物の古着はペルシャ～シルクロードを渡ってきた文様をモチーフにした図柄がいっぱい。1300 年を経ても斬新な形、色使いが生きづいていることに驚かされたのです。おかげでこれだけの万葉衣装を作ることができたのですが、この機を逃したら、ここまではできなかったと思います」。

今回の展覧会の出展数は約 90 点とのことだが、これまで制作した古代衣装は、1500 点に及ぶという。そろそろその終活に入らなければと、山口さんはお仲間と相談を始めているが、何とももったいない話である。

そして、山口さんの古代衣装作りの原点、それも原点中の原点とも言っていいのが、「正倉院」である。

山口さんは言う。「正倉院の宝物は聖武天皇、光明皇后の遺愛の品と思っておられませんか。でも、それだけではないのです」。かつて東大寺には正倉という倉が 20 も軒を連ねて並んでいたという。それが、現在宮内庁に寄進された 1 つだけ残って、「正倉院」とされている。その内部は、北倉、中倉、南倉の 3 つの部屋に分かれていて、北倉は聖武天皇、光明皇后の遺品が納められており衣装はなかったが、中倉と南倉には、東大寺が使っていた品々が納められ、そこには、山口さんにとっては、文字通り、宝物の衣装が納められていたのだ。正倉院宝物衣装は大きく 3 つに分類されるという。①制服と仕事着、②大仏開眼会の楽舞服、③貴族が奉納したと思われる衣服、である。

奈良時代の人々の体格は、男性 163 センチ、女性 152 センチとされているようだが、右の写真は、ギャラリートークが終わった後に撮ったもの。万葉の舞台で家持役の和泉元彌さんが着た貴族の衣装と坂上大嬢役の下田麻美さんが着た衣装の脇に立つ小柄な山口さんが、当時の女性の身長に近かったようだ。山口さんご自身が万葉衣装を着けられたことは見たことはないが、きっとよく似合うことだろう。

今回の、山口さんの「甦る万葉衣装展」は、まさに、飛鳥京から、藤原京、そして、奈良・平城京に至る万葉衣装の変遷を辿ったものだが、それは、単に古代衣装を復元しその歩みを辿っただけではなかった。トークの前に教えてもらった通り、万葉衣装が現代の日常的なファッション、洋服のルーツであることが、復元された衣装を通じてよく分かる展観だった。単なる「甦る万葉衣装展」にとどまらず、「千年を超えて現代に甦った万葉衣装展」だったのである。

明日は、古代衣装史で辿った時代を追って、飛鳥京から藤原京へ、そして、大神神社から山辺の道に沿って北上して、奈良平城京に入る。正倉院は年 1 回しか公開されないので無理にしても、その近くに宿を取り、翌朝大伴家三代の大納言邸があった佐保を訪ね佐保川の畔で、万葉ファンタジスタ家持や憧れの坂上郎女に、万一出会うことができたら……というのは、その 2 人に、最後に詠んでもらいたい歌があるから。